allcinema

陽のあたる場所（1951）

A PLACE IN THE SUN

メディア 映画
ジャンル ドラマ　ロマンス
製作国　アメリカ
色彩　B&W
時間　122分
初公開日 1952/09/16
公開情報 ＰＡＲ

【解説】

作品の出来以上に、神話的な戦後のスター二人、モンティとリズの心ときめく青春像の彫塑に感激しないではいられない、Ｔ・ドライサーの小説の再映画化（３１年にＪ・Ｖ・スタンバーグにより原作と同名の映画「アメリカの悲劇」となっている）。私見だが、ハリウッドがいわゆる青春のナマな部分を映画にできるようになったのは、戦後になり、本作のモンティや、「波止場」のＭ・ブランドの登場があってからで、そこには第二次大戦の影響もある。“世界”をつぶさに見てきた者にとって、それまでのハリウッド的な理想主義や感傷は到底受け容れられるものではなかったろう。リズの生活環境を巡る描写など、本作に甘さがなかったとは言えないが、主人公のジョージ（モンティ）が、潜り込んだ叔父一家（水着作りで成功している）の工場で着々と出世し、関係した同僚の娘アリス（ウィンタース）を捨てようにも喰い下がられ、遂には明確な殺意がないままにも殺してしまう、その下部構造は実にリアル。卑屈なウィンタースの役柄は、ともすると観客の総スカンを喰う所、彼女は些細な愛嬌をそこに盛り込んで、だからこそ、リズの演ずる令嬢アンジェラの気高さを曇りなくする。観客の中には“俺ならばジョージの二の舞はせず、より打算的に行動するだろう”と言う人もあろうが、主人公はその辺、実に人間的に躓いて、子供の頃、母の伝道活動に引きずり回された素地を垣間見せる。圧巻はやはりアリス殺害の瞬間の多義的なロングショットだが、アンジェラと心を通い合わせるパーティの夜の場面や、初めてアリスと情を通じる雨の晩の、窓際に置いたラジオの効果など、恋愛描写が水際立っている。結局、死刑の判決を甘んじて受け入れるジョージ。この心の葛藤は主に内的独白で表現されるのだが、その際もモンティの表情の“揺れ”は、静かで厳かで何度観ても素晴らしい。

【クレジット】

監督	ジョージ・スティーヴンス	George Stevens	
製作	ジョージ・スティーヴンス	George Stevens	
原作	セオドア・ドライサー	Theodore Dreiser	
脚本	マイケル・ウィルソン	Michael Wilson	
	ハリー・ブラウン	Harry Brown	
撮影	ウィリアム・Ｃ・メラー	William C. Mellor	
特殊効果	ゴードン・ジェニングス	Gordon Jennings	
音楽	フランツ・ワックスマン	Franz Waxman	
出演	モンゴメリー・クリフト	Montgomery Clift	ジョージ・イーストマン
	エリザベス・テイラー	Elizabeth Taylor	アンジェラ・ヴィッカーズ
	シェリー・ウィンタース	Shelley Winters	アリス・トリップ
	アン・リヴェール	Anne Revere	
	レイモンド・バー	Raymond Burr	

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。　Copyright (C) 2026 Stingray. All Rights Reserved.